

日本平和学会
2010年度春季研究大会
ドキュメンタリー映画上映

The Strangest Dream

- 1) 上映作品：『The Strangest Dream 』（2008, 89 min 28 s）
Directed by Eric Bednarski
Produced by Kent Martin
Production Agency: National Film Board of Canada

* ノーベル平和賞を1995年に受賞したサー・ジョセフ・ロートブラットの生涯を描いた
ドキュメンタリー映画（カナダ2008年、英語）

- 2) 上映時間帯：土日とも分科会開催の時間帯

6月19日（土）：12:50-14:50

6月20日（土）：12:20-14:20

- 3) 上映形式：

- ・英語による原語上映
- ・参加者の便宜をはかるために、上映会当日

①冒頭に約15分の解説を付し（解説：高原孝生会員[明治学院大]）、上映後にも
意見交換の時間を設けます。

②英文シナリオ全文に加え、重要な部分のシナリオ和訳や内容の紹介を、資料として
準備する予定です。

- 4) 作品解説：ドキュメンタリー映画上映『The Strangest Dream』に寄せて

最新のSIPRI年鑑によれば、昨年の世界の推定軍事費は、ついに1兆5千億ドルを突破した。21世紀に入ってから、年率3%以上の伸び率が続いている。気候変動、感染症の発生、生物多様性の激減、世界恐慌、国連ミレニアム開発目標の不達成、等々、これだけ国境を超えた対処が必要であるような危機が目白押しであるような時代に、破壊を目的とした道具と組織に巨額を費やしている余裕はないはずだ。なのに、という思いに駆られる人は多いだろう。

なぜ軍拡は進むのか。少なくとも次の3つのダイナミズムを指摘できる。

第一に、国家間の相互不信による軍備競争である。このグローバリズムの時代に、暴力を管理する政治システムは、依然として国家に分断されている。防衛的な軍備増強のつもりでも、他国からは逆に見られ、お互いに「安全保障のジレンマ」が発生し、軍備競争が招来される。

そうしたメカニズムがビルトインされているのが、国家に軍事主権を認め続ける現在のシステムである。

第二に、その国家を支配するのが、軍拡に既得権益を有する集団であれば、軍事予算は維持拡大されていく。いわゆる軍産官学複合体の跋扈である。その利益集団は「死の商人」となって自国のみならず他国の軍拡をも促し、商機を失わせるような紛争解決・平和の実現を喜ばない。そして、かれらの利益の局部性・反社会性は、さまざまなイデオロギーと情報統制によって、市民の目から覆い隠されている。

そして第三に、科学・技術の発達自体の自己運動がある。新兵器・新技術の開発に成功したとたん、それを超える兵器を求めて新たな研究開発が開始される。なぜなら、人間の知的能力は基本的に平等であるから、自分が発見し工夫したことは、遅かれ早かれ、他人も同様に考えつくと思えるからだ。研究開発に携わる者は、リードし他者に先んずるため、その限定された領域において、いつまでも走り続けなくてはならない。軍事分野でもそれは同じである。

これら三つのレベルで働く軍拡ダイナミズムは、現実には複合的に作用する。したがって、これを止めるためには、それぞれのレベルで意識的に問題認識の枠組みを広げて別の論理とダイナミズムを求めると共に、実践において複合的・多角的な視野を持つことが必要になってくる。

この映画は、戦時中、自らの意志でマンハッタン計画を離脱した唯一の科学者、ジョセフ・ロートブラットという人物の生涯を描いたドキュメンタリーである。軍拡ダイナミズムから抜け出し、戦争を廃絶するため、この物理学者は 96 歳で亡くなるまで人間的努力を続け、1995 年、ノーベル平和賞を受賞した。核兵器の非人道性を深く認識し、過剰殺戮という狂気の世界に対峙して彼は、研究開発に携わる立場の人間、社会的発言ができる人間、すなわち科学者の社会的責任、という問題を強く意識する。そしてバートランド・ラッセルと共に世界の科学者に呼びかけ（「ラッセル＝アインシュタイン宣言」）、さらに「パグウォッシュ会議」を組織して、核戦争そして戦争一般を、阻止しようとした。カナダ人監督によるこのドキュメンタリーは、核時代の課題を浮き彫りにするとともに、平和学会に集うわれわれ一人一人に何が可能か、どう行動するべきなのかを、あらためて考えさせてくれる好編である。

(明治学院大学国際学部 高原孝生)